



子ども大学学生新聞

第23号
子ども大学
かわごえ新聞部

「好奇心を持って学ぼう」

第8期 184人が入学

子ども大学かわごえの第八期入学式が六月二十七日(土)、東京国際大学第一キャンパス一二教室でありました。今年の入学生は四年生七人、五年生六人、六年生四三人の計一八四人。この日は学生一七六人と保護者七三人、きょうだい一七人が出席しました。たくさんのお客さんで、立見をする保護者もいました。

午後一時から、まずホームルームがあり、酒井一郎理事長がパワーポイントを使って子ども大学かわごえの紹介をしました。入学式は星野学園小六年の大和日菜さんの司会ではじまりました。

「脳にしげきを」遠藤学長

はじめに遠藤克弥学長のあいさつがありました。「入



学おめでとございませぬ。みなさん、大

「疑問を追いかけて」川越市長

ぶところだと思いませんか。たしかにそうですね。ですが、わたしたちは子どもにも大学で学んでほしいと思いい、この大学をつくりました。みなさんは、たくさん

つぎに来賓のあいさつがありました。まず、川合善明・川越市長さんが「子ども大学はとてすばらしい学びの場です。みなさんの身の回りのことで、これどうなっているんだろうと疑問に思ったことを、この大学で追いかけて、しっかりと学んでください」と、励ましのお言葉がありました。

つづいて、鶴ヶ島市教育委員会の浅子藤郎教育長さんが「小学生は児童、中・高校生は生徒、大学生は学生と呼びます。君たちは学生なんです。子ども大学は、

学校では出来ないことが出来る場所です。好奇心を持って学び、「ふるさと学」という言葉の通りに、地元は何があるかを調べたりしましょう」と、お話になりました。

「自由時間を大切に」松田理事長



最後に、尚美学園大学の松田義幸理事長さんが「学校をスクール」といいます。スクールとは自由時間という意味です。八〇歳まで生きる約七〇万時間使えます。そのうち自由時間は二二〜二五万時間あります。なので、この自由時間を小さい時から、

豊かな人生を送ってください」と、自由な時間を大切にするよう、お話ししてくださいました。

「学校で学べないことを学ぶ」

六年生を代表して大塚小六年の堤友花さんが「みなさん、おめでとございませぬ。私も入学できてよかったです。私はこれまで二年間、子ども大学に通って、学校では学べないことを学びました。みなさんも、これからの授業を楽しみにし

ていると思います。この一年間、いっしょにがんばっていきましょう」と新入生歓迎のあいさつをしました。(写真左)

そして子ども大学かわごえジュニア合唱団の七人が「ふるさと」チムチムチェリー「エーデルワイズ」「虹の玻璃(ちきゅう)」「ゆかいに歩けば」を元気よく歌いました。



新聞部の新入部員が十四人

入学式のときに新聞部員を募集したところ、四年生三人、五年生六人、六年生五人の計十四人が集まりました。これまでの部員を含めると二十一人になります。ほかに中学生のシニア記者が十七人います。これから一年間、みなさん取材します。よろしくお願ひします。

子ども期に教育がなぜ必要か

遠藤学長授業 大切な「教わる」気持ち

入学式のあと、午後二時から遠藤克弥学長の授業「世界の学校と子どもたち」がありました。前半は「子どもの発見」について話してくださいました。

授業は、「きみは、何ものだ？」の一言で始まりました。私たちは「子ども？」「おとな？」、どちらでしょうか。子どもと大人は、何がちがうのでしょうか。

「子ども」とは、誰でしょう。五〇〇年前は、子どもは大人とちがう人、小間使いといった程度の認識だったよう、大人と子どもの区別が無かったよう、中世の子どもは五歳ごろからもう大人と同じ遊びをし、七、八歳で徒弟に出たり、大人と同じように飲酒していたそうです。服も大人と同じ。スカートや半ズボンなどの子どもらしい服はなく、小さな子



は動物と同じ扱いで、おもちゃの道具にされたり、うるさい子どもは、しばりつけられたりして、子どもはかわい

くない」という認識の時代だったそうです。

ところが、一七世紀から一九世紀にかけて、「子ども期」の発見が進み、絵や彫刻などにも子どもが意識されるようになりしました。「子ども」が発見された。新しい風景を見つけた、というような話を、遠藤先生はしてくださいました。

(大和日菜記者 星野学園小6年)

二時間目は、主に教育の話をしてくださいました。最初は外国の学校の映像が流れました。一本目は、このあいだ、震災にあつたネパールの学校の映像でした。ネパールの学校は窓が少なく、暗いそうです。ネパールの子どもたちは、朝働かないと、暮らしていけないそうです。二本目は、ベトナムの学校の映像が流れました。どちらの学校も日本の学校とちがいで、大変そうでした。そして、「学校に行けない子どもたちもいる」と先生は言っていました。

つぎに「教育」についての話がありました。なぜ、「教」と「育」がくっついてるのか。なぜ、「教える」だけではだめなのか。なぜ、「育てる」だけではだめなのか。

もともと、日本に「教育」という漢字ができたのは江戸時代で、「教」と「育」がくっついた意味は、親が子どもを「育てる」だけでなく、「教える」ことも必

要だと思ったからだ、先生は教えてくださいました。

そして、教わろうとする人は、教わろうとする気持ちが大変であり、子どもを支援する親は、育てようとする気持ち、子どもは頑張ろうとする気持ちが大事だとおっしゃいました。そして、おたがいが信頼しあい、思いやり、個性を大切にすること、これが「教育」にこめられたのではないかとのことです。

そして、「子ども時代」が発見されて、一〇〇%よかったと話してくださいました。(増田夢実記者 名細小6年)

☆遠藤先生へのインタビュー

昔は自然の中で遊びました

Q 「子ども時代」を短く言うと、どんな時代ですか？

A 「遊び」の時代ですね。子どものころは、どんなことをしていましたか？

A 私は福島で生まれ育ったので、雪がふると、かまくらをつくったり、秋はみんなでクリひろいをしました。道ばたの草で遊んだり、魚つりや化石さがしも好きでした。

Q 今と昔の子どもを比べて、どう思いますか？

A 便利になったけれど、もう少し、ゆつくり暮らした方がいいと思います。昔の子どもはゆつくり学んでエネルギーを体にかためることができたけれど、今の子どもは勉強についていくのががんばって、エネルギーがすぐなくなってしまうように思います。

(大和日菜記者 星野学園小6年、増田夢実記者 名細小6年)

☆学生の授業感想

◇すずきみうなさん 山田小6年

「昔の子どもと比べれば、今の時代の私はとっても幸せなんだなあと思いました」

◇小島大馳君 福原小4年

「おもしろかったし、昔の教育は、すごくよかった」

(土田莉子記者 山田小6年)

◇山本愛花さん 高階北小6年

Q 初めて知ったことは何ですか？

A 子どもを愛さない時代があったことです。

(宮本愛音 シニア記者 鶴ヶ島中2年)

◇石川けんたろう君 福原小4年

「昔の生活と今の生活がちがっていることが分かった。面白かった」

(小島未来 シニア記者 福原中1年)

☆記者の授業感想

◇関根英瑠麻記者 古谷小5年

一番心に残ったのは、中世ヨーロッパの絵では、子どもの顔が大人の顔でかかっていることや、子どもはうるさいから、しばったり、かごに入れたり、一方で子どもがかわいく見られていたことでした。

◇今牧優那記者 西武文理学園小5年

特に印象に残ったことは、中世ヨーロッパでは「教育」という考えがなかったということ。子どもが、子どもとして扱ってもらえなかったと聞いて、かわいそうだったなと思いました。そして「子ども時代」のある今の時代に生まれて幸せだなと思いました。

◇高山夏葵記者 西武文理学園小5年

中世ヨーロッパの人は、子どもでもお酒をのんでいたことにびっくりしました。